



活発化する東南アジアの教育と大学教員職の現状

皆様、恐らくお初にお目にかかります。酪農学園大学の中谷暢丈先生よりバトンを引き継ぎました、高知大学理工学部の小崎大輔と申します。つたない文章ではありますが、興味を持っていただければ幸いです。そもそも、中谷先生とは、私が広島大学の修士課程で田中一彦研究室に在籍していた頃からの大先輩と後輩のような関係で、その大先輩からバトンを引き継いだことを非常に光栄に感じております！

さて、初めに私が勤めております高知大学及び昨年まで勤めておりました Universiti Malaysia Pahang (UMP) について簡単に御紹介させていただきたいと思っております (University ではなく Universiti)。

高知大学は、1922年に旧制高知高等学校などを母体として設立されました。近年は地域協働学部の設置(2015年)、人文学部及び農学部を人文社会科学部及び農林海洋科学部へ改組(2016年)、理学部を理工学部へ改組(2017年)し、新体制での活発な研究・教育活動がスタートしています。

一方で、UMPは、各州を代表する国立大学を設置するというマレーシア政府の方針の下、2002年に設立され、全9学部、すべてに“Engineering”もしくは“Industrial”が入るという、工業大学としての特色を持っています。私はその中の“Industrial Sciences & Technology”に所属しておりました。それでは、本エッセイの表題である“活発化する東南アジアの教育事情と大学教員職”に関して、私の経験を踏まえながら書きたいと思っております。

1. マレーシアの大学教員職

マレーシアは2020年の先進国入りを目指し、中進国としては異例の高さの人口増加率を示しています。中でも注目すべきは、生産年齢人口(総人口の64%、約1843万人)、年少人口(総人口の30.3%、約862万人)及び外国人労働者比率(総雇用者数約1272万人の13.5%)の高さです。特に、年少人口の増加に伴い、教育者が不足傾向にあり、あくまで私の所属していたUMPにおけるケースですが、修士取得者を“Junior Lecturer”として大学教員に採用していました。さらに、不足した教育者は国内外問わず募集するため、日本人の若手研究者にとってもチャンスは多く、今後、大学での研究職を希望される方の一つの選択肢としても考えられるのではないのでしょうか。

2. マレーシアの大学への就職

では、マレーシアの大学にはどのような手順で就職したら良いのか？ですが、私の経験も含め以下のような方法があります。

①紹介：私の場合は、現在、岐阜大学で准教授をされているリム・リーワ先生からUMPの講師募集のお話を

戴き、面接を経て、就職と相成りました。

②大学間の姉妹校協定関係の活用：私の知人でマレーシアの大学に就職された方は、所属大学と姉妹校協定関係にあったマレーシアの大学との会議の際に、教員募集の話があり、就職が決まったそうです。

③インターネットの活用：私がUMP在職時、非常に多くの外国人教員(インド、インドネシア、バングラディシュなど)が在籍しており、その就職過程を聞いた際に最も多かった回答が、大学のホームページに掲載された公募からの採用でした。日本国内の研究教育関連の就職情報に関しては、研究者向けの就職サイトから簡単に検索可能ですが、国外の大学及び研究機関の募集は紹介されていません。そこで、「Academic job/Vacancy/University/Malaysia (国名)」のようなキーワードで検索することで情報を収集し、メール及び書類で連絡し、面接を受けて就職されたそうです。

3. マレーシアの大学での仕事と得られた経験

最後に、マレーシアの大学に就職して、どうだったか？ですが、研究、教育、資金確保、大学業務など、日本の大学とほぼ同様です。ただ、その中で得られた海外ならではの経験として、現地の研究者との継続的な共同研究関係を確立できたことに加え、経済発展に伴った大気、水及び土壌環境問題の顕在化している地域をフィールドとできたことは、イオン分析とそれを用いた環境分析を専門分野とする私にとって非常に意義深いものと感じています。他にも、UMPでは在職の日本人が私だけということで、日本の大学との姉妹校協定設立に関する強い要請を受け、UMPの前職地である群馬大学工学部の板橋英之先生の御協力もあって、姉妹校協定及び交換留学制度などを立ち上げることができました。

このように3年間と短期でしたが、多くの方々のご協力のもと、研究、教育、大学業務の面から海外経験を積めたことが現在の高知大学での職に繋がっていると感じており、今後、大学での研究教育活動を希望する分析関連分野の方々の選択肢の一つとして、活用できる情報があればと思い筆を走らせました。ご参考になれば幸いです。

さて、今回のリレーエッセイの執筆者の高山信幸様の御紹介をさせていただきます。高山様は、岐阜大学の竹内豊英先生の研究室に所属され、スイス・メトローム社でのインターンシップを経て2016年度に博士号を取得されました。現在は、地球環境産業技術研究機構にて研究員をされており、キャピラリーカラムの作製に関する御指導を賜るなど、研究面でもお世話になっております。それでは高山様、宜しくお願い致します。

〔高知大学理工学部 小崎大輔〕